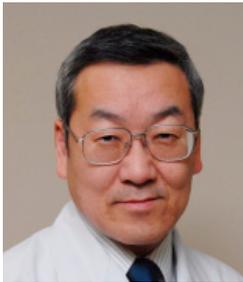




医学部医学科教務委員長（研究科長補佐）就任にあたって

腎泌尿器外科学分野 教授 野々村 克也



本間研究科長・学部長二期目がスタートするにあたって、医学部医学科教務委員長をするよう依頼されました。学部教育は旧カリキュラムから新カリキュラムへの移行に混乱があったもののほとんど終了しており、それ程多くの作業はないであろう

とお引き受けしました。しかし、法人化後の医学部における管理運営面での種々の問題が未だ解決されず残っており、本間学部長以下執行部の皆様とともにこれから一つ一つ整備していく段階であることが少しずつ理解できるようになりました。

当面の課題として、①学士編入学の6ヶ月前倒しによる主として基礎医学系カリキュラムの改訂、②前期試験に面接を導入する一方、後期試験・帰国子女特別選抜試験・学士編入学試験などの簡素化を図るといった医学部入試制度の再検討、③大学法人中期目標の達成度・業績の点検評価の報告書作成、④解剖系（法医、病理を含む）技術職員の確保を意図した医学教育開発室から医学教育支援室への改組、⑤香港大学あるいは札幌医科大学や旭川医科大学との学部学生の交流プログラムの発足など問題があります。これらに加えて、医学部創立90周年記念事業の推進も重なっており、元来の非力のパワーでは日常の診療・研究に関してはおぎなりの状態となっております。

奇しくも、期を一にして本年4月より日本泌尿器科学会の教育委員長も兼任しております。こちらでは①学部

教育・初期研修過程における泌尿器科学のあり方、②泌尿器科領域における基礎研究・臨床研究のあり方、③診療動向に基づく卒後・生涯教育のあり方、④専門医（後期研修）内容・教育施設・指導医教育のあり方などが問題となっており、具体的解決策にむかって始動しております。

現在の医学教育は文部科学省主導のCBT、OSCEを中心とした画一化した学部教育と厚生労働省の推進するプライマリ・ケア重視の初期臨床研修カリキュラムが行われております。泌尿器科という極めて狭い視野からみると、双方の省とも泌尿器科的疾患について極めて頻度の高いものも含めほとんど考慮されていないこと、二つの省のすり合わせは端緒についたばかりでその見直しは数年後でないとは期待出来ないことなどがあげられます。このような専門性を度外視したような教育システムは産科・小児科・脳外科・血管外科ばかりでなく多くの専門科における医療の質・効率性・对患者に対する信頼性を危うくしている現状があります。このような医師全体にとって厳しい医療情勢にあって、いわゆる人間性豊かな素晴らしい医師を育てていくことは極めて困難であります。しかし、翻ってみると何時の時代にも矛盾・問題はあったはずで、我々が現在実際に抱えている問題に立ち向かうのが私の仕事と理解しております。

以上のような状況を考慮しますと、教室員には申し訳ないのですが、今後2年間は本間学部長の指導のもと学生・泌尿器医の教育に力を注いでいく所存です。この分野は全くの素人で戸惑うことばかりですが、関係各位の皆様方のご指導宜しくお願い申し上げます。

研究科長補佐に就任して

分子病理学分野 教授 笠原正典



平成19年4月1日付けで研究科長補佐を拝命いたしました。これまで医学研究科には、研究科長補佐というポジションはありませんでしたが、執行部機能の充実を図ることを目的に、この4月に新設されたものです。補佐の仕事は主に教育面で研究

科長を支えることであり、私は補佐と同時に研究科教務委員会委員長を拝命しました。よろしく願いいたします。

ご存知のように、平成19年度には医学研究科の大学院が再編されました。博士課程では、従来の6専攻が1専攻（医学専攻）となり、基盤医学、臨床医学、社会医学の3コースが設けられました。基盤医学コースは従来の博士課程の内容に近いスタンダードなコースですが、臨床医学コースは臨床研究遂行能力の習得に重点を置いており、学外の医療機関に設置された連携講座に一定期間在籍し、研究指導を受けることもできます。また、社会医学コースでは社会医学、予防医学の教育が強化され、これらの領域で活躍する高度専門職業人の育成に重点をおいています。このように特徴をもった3つのコースが用意された他に、学位の審査制度も変更されました。すなわち、中間審査制度が導入され、さらに学位論文は従来のように学術雑誌に掲載された論文そのものではなく、学位申請論文（thesis）とすることになりました。

修士課程はこれまでどおり医科学専攻の1専攻で構成されていますが、医科学コース、医学専門コース、社会医学コースが設けられました。特にユニークなのは医学専門コースです。このコースは、医学、特に基礎医学の教員を目指す医学部医学科卒業生が減少しているという現状を踏まえ、医学部医学科以外の卒業生の中から、将来、医学の教育・研究に携わることを希望する学生を厳選して教育するものです。さらに、博士課程、修士課程に共通する新しい試みとして、本学大学院医学研究科、旭川医科大学大学院医学系研究科、札幌医科大学大学院医学研究科・保健医療学研究科の間で単位互換協定が締結されました。単位互換の対象となる科目や具体的な手続きは今後決められる予定ですが、この協定により各大学に在籍する大学院生が他研究科で開講される授業を履修し、単位を修得することが可能になりました。

このように、医学研究科の大学院教育は本年度から一段と充実し、時代の要請に適ったものとなりましたが、新医師臨床研修制度が始まってから医学科卒業生の大学院離れが全国的に懸念されるなど、大学院を取り巻く環境は必ずしも楽観できるものではありません。医学研究科の将来は、大学院をいかに魅力的なものとし、有能な人材をひきつけることができるかに懸かっているといっても過言ではありません。研究科長補佐として、大学院教育の発展に微力を尽くす所存でありますので、ご支援をお願い申し上げます。

教授就任挨拶

人工関節・再生医学講座 特任教授 眞島任史



平成19年6月16日付けで、医学研究科人工関節・再生医学講座の特任教授を拝命いたしました。本講座は関節機能障害に対する人工関節置換術および関節機能障害の予防と新たな治療に関する研究に資するため、整形外科学分野の三浪明男教授がご

尽力され作られた寄附講座です。本講座では今後需要の増加と発展が予想される関節置換術を推進するために、コンピューター支援手術の研究、関節置換に用いるイン

プラントの研究、臨床成績に関する研究等の人工関節外科分野を主たる研究領域とすると共に、関節置換の原因となるリウマチおよび変性疾患に対する分子生物学的・糖鎖工学的解析を行なうと共にその成果を応用し、関節変性疾患の予防と再生医療を用いた関節組織再建の研究を行なうという大命を仰せつかりました。

私は昭和59年北海道大学医学部を卒業、当時、松野誠夫教授率いる整形外科講座で整形外科の研鑽を開始しました。昭和61年からは金田清志教授のもとで、現運動機能再建医学分野・安田和則教授の直接のご指導を仰ぎ膝関節外科の研究を開始しました。平成元年から平成4年

までは応用電気研究所（現在の電子科学研究所）で当時の林紘三郎工学部教授のもと「生体軟組織のリモデリング」の研究を生体力学の観点から行なっていました。その後釧路市立病院に5年間勤務した後、カルガリー大学で3年間分子生物学の観点から「生体軟組織のリモデリング」の研究を行ない、平成12年より再び北大に奉職することとなりました。帰国後は現在の整形外科分野三浪明男教授のもと、さらに研究を継続させていただき、遺伝子病制御研究所分子免疫分野の上出利光教授のご指導で生体軟組織のリモデリングにはオステオポンチンが深く関与していることを明らかにしてきました。平成13年からは「運動器疾患に対する再生医療」の研究にも着手し、今まで再生しないといわれた軟骨の再生や、癒痕でしか治癒しないといわれた腱・靭帯を元の組織と同じ組成で再生させることを目的に北海道大学次世代ポストゲノム研究所で、理学研究科西村紳一郎教授にご協力頂き、研究成果をもとに海外を含む特許申請および取得を行なっていました。臨床では平成16年に8年間独自に研究し、開発した人工足関節の特許を申請することができました。また現在まで、術者として下肢人工関節置換術約600例、膝関節鏡視下靭帯再建術約300例の手術経験があります。

高齢化社会の現在、関節疾患は65歳以上の人口における慢性疾患の半数を占めています。また65歳以上の高齢

者の介護が必要となる原因の24%を関節疾患が占めています。関節変性疾患に対して現在最も多く行なわれている治療方法は、人工関節置換術であり、本邦では年間7万例との報告があります。この手術成績は術者の技術に負うところが大きいという問題点がありました。これを解決するために、近年コンピューター支援手術が開発されつつあります。本講座ではコンピューター支援手術の有効性の検討、人工関節のインプラントの評価、現在よりもさらに有効な手術式の開発を行いたいと考えております。さらにインプラントの評価をもとに耐久性にすぐれた、より生体機能を再現する新しい人工関節を開発することも考えております。また、関節変性疾患の予防は治療と表裏一体をなすものであり、従来行ってきた生体力学および分子生物学的研究の成果を今後さらに発展させ、近年飛躍的に発展してきた細胞レベルからの組織工学的技術を応用することにより、その研究成果をもとに関節組織再建の臨床応用の確立とさらなる発展を図りたいと思います。

近年の大学を取り巻く環境変化の中、伝統ある北大の名に恥じぬよう、北大スキー部で培った堅忍不拔の精神でさらに精進し診療・研究・教育を続けていく所存でございます。各研究科をはじめ関連各部署各位のご指導、ご支援、ご協力をお願い申し上げます。

「分子制御外科学講座 Department of Molecular Surgery」

新設にあたって

分子制御外科学講座 特任教授 尾崎倫孝



James Watson & Francis ClickがDNA二重らせん構造を発表したのが、1953年。爾来、遺伝子研究は飛躍的に進み、一部の限られた研究者の独壇場であった分子生物学も我々の手に届く研究対象となってきました。最近では、遺伝子・染色体

のみならず蛋白質レベルでのさらに高度な解析も行われるようになりつつあります。他方、分子レベルでの発現・機能解析を細胞レベルから臓器・個体レベルに応用すべく種々のhigh through-putの解析技術も種々の分野研究に導入されてくるようになりました。とくに、マイクロアレイをもちいた遺伝子・染色体などの解析はこの10数年で飛躍的に進歩・普及し、外科領域でも基本的な解

析手法のひとつとなりつつあります。これらの目を見張る技術革新により、これまで不明であった病態が明らかとなり、新たな治療薬・治療法が芽生え、難病とされていた多くの疾患の治療にも光がさしてきました。

私は、当初臨床医（外科医）として自らのキャリアをスタートさせ、長年一般外科および移植医療の世界に身を置きました。外科医は、メスをもち病気に立ち向かう。もちろん、これが外科医としての基本・本分であろうかとは思いますが、しかしながら、前述のごとく種々の分子生物学的な手法の進歩により、疾患概念が大きく変わろうとしていることもまた紛れもない事実です。こういった手法を応用することにより、より効果的で適切な治療手段を選ぶのは当然のことと思えます。今や総合的・系統的な病態の理解により疾患概念が変わりつつあり、外科的疾患と内科的疾患の境界はより不明瞭となってきて

います。それ故、今まさに分野・専門にとらわれない多角的そして有機的な疾患へのアプローチが期待されてもいるように感じます。もちろん、臨床に応用される診断・治療法はしっかりとした病態の解析・理解に基づいて開発されなくてはなりません。昨今、分子標的治療に向けた研究が進んできており、遺伝子治療、蛋白・ペプチド治療などの研究・開発がさかに行なわれるようになりました。より副作用が少なくまた効果的な治療を目指して、従来の化学物質誘導体の分子標的治療への応用なども検討されてきています。こういった研究開発は、内科的疾患・外科的疾患を問わず行われるべきであり、かつ理・工・医・薬学の知識と知恵を生かした融合研究として発展していくのがベストと考えています。

さて、「分子制御外科学」という言葉は一瞬奇異に聞こえるかもしれませんが、外科領域における診断、治療の手段をマクロからミクロまで広げるといって非常に的を射たものと思います。本講座では、主として外科治療に関連する疾患および病態を分子レベルで理解し、それらを具体的な診断・治療に結びつける研究を行いた

いと考えています。私は、これまで移植関連の研究をきっかけに「細胞内レドックスと細胞機能制御」、「肝再生・障害のメカニズムと病態生理」を研究してまいりました。肝の病態に関しての研究は、私の一番の興味でありライフワークとなるものと思います。現在、国内外で何人かのLiver Maniaの方々と仲良くなりユニークな研究ネットワークが出来ましたので、これからも楽しく続けていきたいと思っています。また私の新たな研究テーマとして、分子レベルでの臨床診断に向けた「分子機能可視化による生体イメージング」、「Cancer Stem Cellをターゲットとした抗体治療」などの仕事を進めていきたいと考えています。これらは、まだ研究の端緒に就いたばかりですが、幸いにも様々な分野の共同研究者の方々に恵まれ、これから積極的に進めていきたいと考えています。皆様のお力添えをいただき、学部、分野、講座の壁を超えて研究の幅を広げ、実りある成果をあげられるよう努力したいと思っています。何卒お引き立ての程よろしくお願い致します。

東北棟竣工式及び祝賀会の開催について

副研究科長 白 土 博 樹

ついに医学研究科東北棟が完成いたしました。平成19年7月17日に同棟の竣工式および祝賀会が開催されました。竣工式には、佐伯浩総長の他、本学の役員も多数参加され、1階から5階までの各部屋をご覧になりました。祝賀会では、佐伯総長から以下のようなご挨拶を頂き、本堂理事が代読されました。

「このたびは、本間研究科長をはじめ医学研究科の皆様のご努力が実り、医学研究科連携研究センター『フラテ』を含む東北棟が完成されましたこと、まことにおめでとうございます。真新しい建物を前に、皆様ご希望に満ち溢れておられることと、お喜び申し上げます。

大学が3年前に法人化し、そのあるべき姿を模索している中で、医学研究科が法人ならではの方法論を見出してこの東北棟を創設されたことは、大変注目するべきであると考えております。国立大学の運営は、以前にも増して、競争的資金の獲得が重要となり、結果として国全体の方針に沿った計画を強いられる場面も多くなってきております。そんな中、この東北棟は、まさに医学研究科が10年20年先の展望を描き、自らの意志で自らの裁量により打ち立てた組織であり、その独立精神に敬意を表するところであります。私は、就任のご挨拶で述べましたように、教員が教育研究の没頭できる環境の充実に全

力で取り組んで参る所存でございますが、そのためには皆様のご協力が必須であります。この東北棟は教員への環境整備を医学研究科が率先して具体化されたという面でも、高く評価されるべきであると思っております。

北海道大学には、ご存知のように教育研究の基本理念として「フロンティア精神」「実学の重視」「国際性の涵養」「全人教育」の4つの柱があります。この東北棟に開設された連携研究センターは、(1) フロンティア精神を持って新しい融合領域の研究を目指し、(2) 実学を重んじて産学連携を促進し、(3) 国際的な研究協力により研究者の国際性を高め、(4) 医学以外の領域との連携を深めて全人的教育を行うという、まさにわが校の理念を実現しており、すばらしい試みであると思っております。

現代の医学は、いわゆる生命科学や薬学だけではなく、物理学や工学や情報科学など極めて広い範囲の領域の科学者や関連職員が連携してはじめて成り立つと聞いております。この東北棟が、そのような現代医学の発展のための研究教育のプラットフォームとしてますます発展することを願い、前途を祝して、ごあいさつとさせていただきます。

本日は、まことにおめでとうございます。」

今後、東北棟でどんな研究がなされ、どんな人材が育っていくのか、楽しみです。なお、東北棟竣工式では、できたてはやほやの連携研究センター『フラテ』のパンフ

レットが配られました。ご覧になりたいかたは、広報室までどうぞ。

「橋渡し研究支援推進プログラム」の採択

副研究科長 白 土 博 樹

平成19年度「橋渡し研究支援推進プログラム」の実施機関として、北海道大学医学研究科を含む「オール北海道先進医学・医療拠点形成」が採択されました。このプロジェクトでは、5年をかけて、札幌医科大学および旭川医科大学と協力して、先進医学・医療の橋渡し研究や臨床治験に関する「北の拠点」の形成を目指します。「橋渡し研究支援推進プログラム」は、医療としての実用化が見込まれる有望な基礎研究の成果を開発している研究機関を対象に、シーズの開発戦略策定や、薬事法に基づく試験物製造のような橋渡し研究の支援を行う機関を拠点的に整備するとともに、これら拠点の整備状況を把握し、拠点間のネットワーク形成などによりサポートする体制を整備することを目的としています。

本事業は、橋渡し研究支援機関の機能強化、橋渡し研究支援を行うための人材の確保・登用・育成や橋渡し研究支援を担う「橋渡し研究支援推進プログラム実施機関」

として、神戸先端医療センター、東京大学、大阪大学、京都大学、東北大学、オール北海道の6拠点8施設が採択されました。本プログラムでは、各拠点で5年間で2つの薬事法に基づく治験を成功させる必要があります。大学間の枠を越えて、未来を変えるような橋渡し研究を成功させ、オール北海道の本質的な創造性が試されますが、今年度はその土台作りにじっくり時間をかけ、外部からの専門家の登用を予定しています。同時に、北海道大学病院は他2大学病院とともに、文部科学省・厚生労働省の「新たな治験活性化5ヶ年計画」（平成19年3月30日）を実現するために、北海道地域の治験中核病院として認定されました。北大病院の先進医療支援センター（治験管理センター）は、その優れた治験実績に基づき、人材育成や高度な治験・臨床試験を可能にするべく、今後さらなる発展が期待されます。

未来医療イノベーションの1年：光イメージンググループ

時間生理学分野 寄附講座時間医学講座 准教授 本 間 さ と

文部科学省・科学技術振興調整費による先端融合領域イノベーション創出拠点形成プログラムは、産学官の協働により先端的な融合領域において、次世代を担う研究者・技術者の育成を図りつつ、将来的な実用化を見据えた基礎段階からの研究開発を行う拠点の形成を目的としている。民間が協働機関として研究資金を国と同額供出し、研究機関と協働で新たな研究開発拠点の形成を目指す点に特徴がある。昨年度、医学研究科と先端生命科学研究院は、塩野義製薬および日立製作所を協働機関とし、総長を提案者として「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」を申請し、採択されるに至った。その経過とイノベーション拠点形成プログラムの目的に関しては、すでに医学研究科/医学部広報29号（2006年9月号）に、核医学分野の玉木教授と放射線医学分野の白土教授が詳細な記事を掲載されているので参照されたい。本プログ

ラムは、3年目の絞り込み審査をクリアし、7年目の中間評価で目標の達成が確認されれば、最終的に10年間に渡り1拠点当たり年間5～10億円の研究資金を得て、創薬と分子イメージングの融合研究拠点を形成するものである。昨年度末には外部評価委員による厳正なる評価を受け、無事1年が終了し、本年4月より、2年度の研究が開始された。ここでは、この1年の経過と、私達が担当している光イメージングに関する研究について紹介したい。

「未来医療イノベーション」の1年

申請が採択された段階で、本プログラムが科学技術振興調整費による委託研究であることから、研究成果への厳しい評価が予測された。医学研究科と先端生命研における研究の方法・目標は、一方は分子イメージング、他

方は糖鎖科学と若干異なる。これに、基本的には営利を追求する2企業が参加しての本プログラムの遂行と成功のためには、研究科や会社の壁を越えて意思の疎通をはかり、事務連絡や研究情報を共有し、常に方向性の確認／修正が重要と考えた。そこで、毎月1回、研究科・企業・事務が参加するトップ会議がもたれ、また、その下で実質的な研究の進捗状況確認と事務連絡のため、医学研究科内の連絡会議が月1回開催された(図1)。さらに先端生命研と協同で年2回の全体シンポジウム「未来創薬・医療イノベーションシンポジウム」、毎月1回の研究科内セミナー「未来医療イノベーションセミナー」を開催することとなった。全体シンポジウムとしては、昨年9月19日には、事業開始を記念する第一回会議「患者さんのQOLを最優先したタンパク修飾技術を用いた次世代創薬と光計測技術を用いた個別化医療との融合」が、阪大生命機能研究所の長田教授、ノーベル賞受賞者で米国ソーク研究所教授のブレナー博士を特別講演者に迎え開催された。本年3月9日には、第2回シンポジウム「分子イメージングを活かす」が、放射線医学研究所の米倉理事長、阪大微生物学研究所の谷口教授を招待講演者に、福井大学教授の藤林教授を基調講演者に迎え開催された。さらに本年6月18日には米国National Cancer

Instituteの小林博士、NIH Biomedical Imaging and Bioengineering研究所のペディグリ博士を含む学内外の4名の特別講演者を迎えての第三回会議「未来創薬から医療への架け橋」を開催した(図2)。一方、医学研究科内で行う「未来医療イノベーションセミナー」は、各グループにおける研究の進捗状況を持ち回りで報告すると共に、関連領域の最先端知識の取得と、グループ内、グループ間の連携を目的として行われている(図3)。すでに本年7月に9回目を終え、毎回学内外の多彩な講師陣による講演と、熱心な討論が行われ、講座や研究科だけでなく、大学の壁を越えての交流を図った。その結果、これまでほとんど接点がないと思われていた領域間にも、様々な研究開発のシーズがあること、また、お互いに応用可能な技術が多数存在することがわかり、新たな驚きの1年であった。最長10年間のプロジェクトとはいえ、延長が認められるには厳しい審査で高得点を得る必要がある。そこで、参加する研究者は、ただでさえ忙しい日頃の研究・教育・診療に加えて、多大なノルマを背負ったことになる。しかし、この内部での厳しいチェックシステムのおかげで、本年3月には外部評価委員による高い評価も得、無事1年の計画を終えることができた。初年度は研究費支給開始の都合上、実質スタートが遅れ



図1：月1回の連絡会議風景



図3：毎月の未来医療イノベーションセミナー風景。医学部図書館特別会議室にて行われた7月19日の第8回セミナーの様子。



図2：本年6月の第3回未来創薬・医療イノベーションセミナー。医学研究科臨床大講堂を埋めつくす聴衆が集まり、先端イメージングの世界に酔うことができた。



図4：CCDカメラ、インキュベーター体型の発光分子イメージング装置の外観(左)と内部(右)

たため、本年度がまさに正念場であり、グループの各研究者は、来年5月ころから始まる3年目の報告と審査に向けて、さらに研究をパワーアップさせている。

光イメージングとイノベーション

医学研究科が日立製作所を共同研究機関として推し進める「医療イノベーション拠点形成」は、分子イメージングを用いた先端的融合領域医療システムの開発であり、大きく3つの研究課題、すなわち「PETイメージング」、「光イメージング」、「分子追跡治療」がある。このうち、光イメージングは、主に生物発光による分子イメージングを医療に応用する試みであり、やはり、昨年度にスタートした連携研究センター「フラテ」の基盤分野と連携分野が中心となって行う、最初の大きなプロジェクトでもある。研究に当たる教員は、時間生理学の本間教授、棚橋助教、西出助教と私、連携研究センター光生物学分野の近江谷教授、秋元特任助教、寄附講座時間医学の吉川特任助教、運動機能再建医学分野の安田教授と高機能代替指示組織開発医学分野の権特任助教、さらに技術補助員1名が協同で研究にあたっている。

発光を生理機能の測定、診断、検査試薬等に応用する技術発展はめざましく、発光酵素のクロニングや改変など、分子生物学的な技術応用と、微量測光を可能とする光学系の著しい進展に支えられ、様々な光プローブが生体に応用されはじめた。発光蛍光の医療への応用には、生体が発する微量発光や蛍光を測定する場合と、発光酵素反応により生じた光を利用する場合がある。今回は、主に発光酵素である甲虫やウミボタルルシフェラーゼ遺伝子を利用し、目的遺伝子発現や蛋白レベルを*in vivo*、*ex vivo*、*in vitro*で連続測定する技術を開発改良するとともに、医療への応用を目指している。ルシフェラーゼは発光酵素の総称であり、基質特異性が非常に高

く、*photon counting*により広範囲で優れた定量性を示す。また、本来生体が放つ冷光であるため、細胞障害性が低く、基質存在下で長期間に渡りリアルタイム計測が可能である。環境にも生体にも優しい光プローブの使用は、長期にわたる時空間解析が可能なイメージングツールであり、遺伝子発現連続測定だけでなく、発生・発達・組織再建などで生体分子を追跡する優れたマーカーとなり、腫瘍細胞のトレースと薬物や放射線治療効果判定、など、様々な系に応用可能である。また、発色波長、分泌・非分泌の差、発色パターンの差などのルシフェラーゼそのものもつ差異を利用し、単一細胞から多機能の測定が可能であるだけでなく、細胞内小器官へのタグの付加により、それぞれの小器官における機能、微量発光酵素の濃縮、など同一細胞内で様々な多機能のマーカーとなりうる。発光量のリアルタイム定量には、組織レベルでは高感度光電子増倍管による測定が、一方、一細胞レベルや細胞内小器官レベルの定量には冷却CCDを用いたイメージングが用いられる(図4)。私達は、本年に入り、これらの技術を応用し、これまで40年来謎とされていた、季節による活動リズム調節を行う二つの時計の局在や、中枢覚醒剤により睡眠覚醒リズムを調節する中枢機構を報告した。また、本年度は、分泌型ルシフェラーゼを利用した灌流システムの作成、覚醒個体における遺伝子発現の発光量による連続モニタリング、軟骨形成に関わる遺伝子発現の発光モニタリングによる検定などを課題とし、全員が一丸となって研究に励んでいる。発光イメージングの世界は、まさに*Seeing in believing*である。遺伝子の発現や蛋白局在が、生きた細胞内で、手に取るように「見る」ことができる。この技術を単に研究のツールとしてだけでなく、医療の様々な局面に応用することも、私達に与えられ課題といえよう。

連携研究センター「フラテ」のこの1年

光生物学分野 教授 近江谷 克 裕

学際的医学研究の拠点として平成18年4月1日に発足いたしました連携研究センター「フラテ」は2年目の夏を迎えています。本連携研究センターは学際的医学研究の拠点として設置され、長期的展望に基づいた堅実な知を追及する基礎的研究と目標を設定した戦略的研究に基づく大胆な知の追及を融合することを目標に、他大学に例を見ないユニークな組織です。現在、4つの研究部門(「分子・細胞イメージング部門」、「再生医療・組織工学部門」、「脳科学部門」、「人獣共通感染症診断・治療部門」)

と研究支援部門が活動しております。既に、広報第28号において、安田副研究科長(当時)より連携研究センター「フラテ」の設置の背景や概要は述べられていますので、この1年間の活動状況を振り返りたいと思います。

1. 研究部門の充実

図1は4つの研究部門の組織図です。分子・細胞イメージング部門は3つの基礎分野と3つの連携分野がタッグを組んでおります。18年度に採択された文部科学省・科

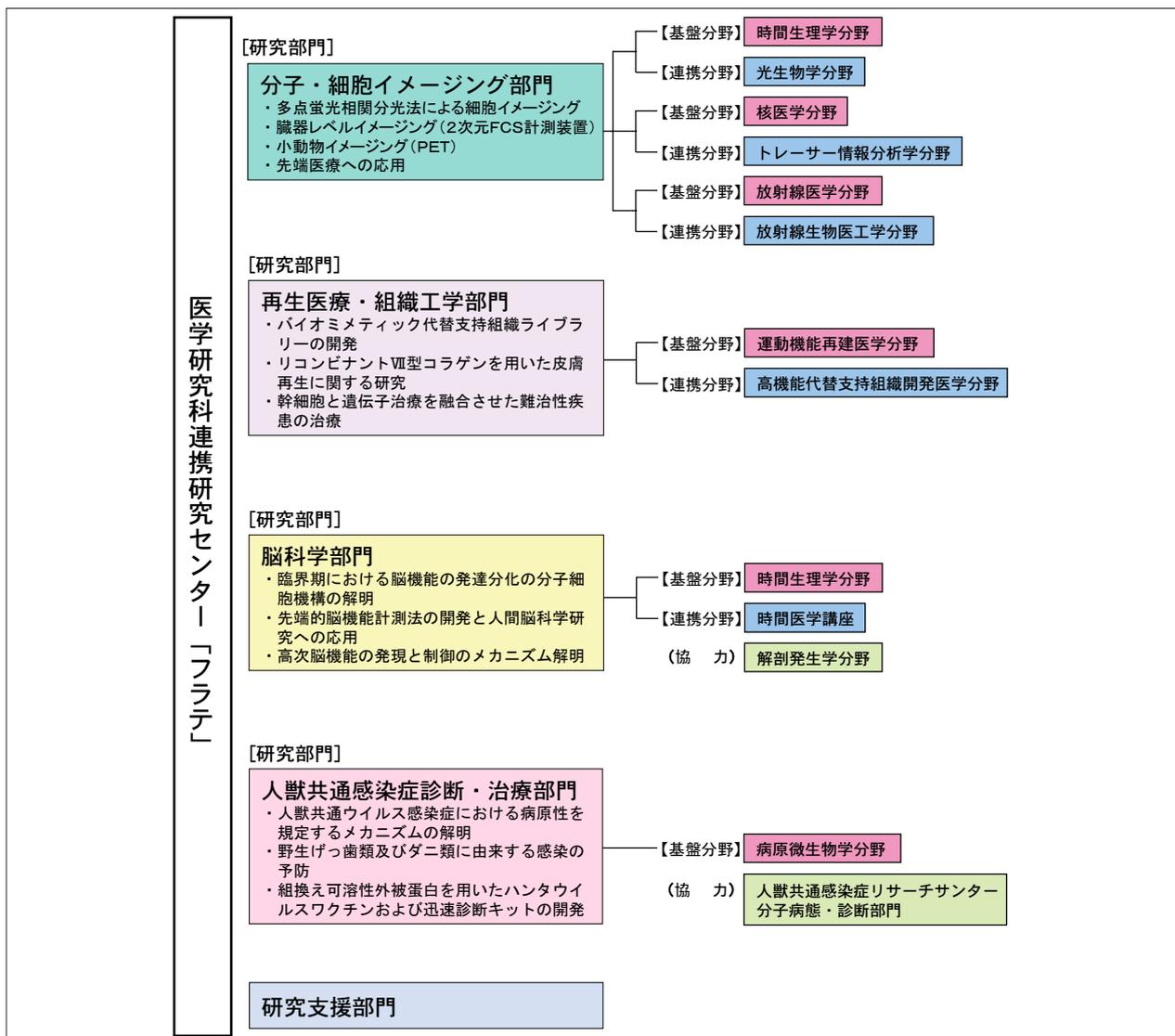


図 1

学技術振興調整費による先端融合領域イノベーション創出拠点形成プログラム「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」の研究テーマと連携し、研究課題を推進しております。再生医療・組織工学部門は北大リサーチ&ビジネスパーク構想と連携しております。脳科学部門は1つの基礎分野と1つの連携分野、それに協力する分野が連携し、北大脳科学研究教育センターと連携しております。また、人獣共通感染症診断・治療部門は人獣共通感染症リサーチセンターと連携し活動しております。さらに、本年8月に文部科学省橋渡し研究（TR）拠点形成プロジェクトが採択されたことから、今後、連携研究センターに加わることとなります。益々、充実した組織へと変わりつつあります。また、研究員は本年7月の時点で、基盤教員（教授5名、准教授1名、講師1名、助教6名、助手1名）、任期付教員（教授2名、うち1名は本年10月に赴任予定）、特任教員（助教4名）の合計20名、技術職員2名、事務補助員2名、事務補佐員1名の陣容

です。

2. 連携研究センター創設記念シンポジウムの開催

創設記念シンポジウムが「医療への貢献を目指す多領域融合研究の最先端」をテーマに平成19年2月9日、北海道大学学術交流会館にて開催されました。北海道大学総長中村睦男先生の祝辞に引き続き、4つの研究部門の各先生方より研究紹介及び研究展望が語られ、多彩な研究活動が紹介されました。最後に、医学研究科OBの玉川大学丹治順教授の「大脳前頭前野による行動の統合的な制御の機構」という演題の記念講演が行われ、盛況なシンポジウムとなりました。なお、当日は学内外から120名の教育者、研究者の参加がありました。

3. 連携研究センター「フラテ」オープンラボのオープン

連携研究の活動の特徴は、オープンラボを利用した基

盤教員と連携教員の共同研究であること、期限付きのプロジェクト研究であること、研究活動は外部資金で行うことなどです。第一の特徴であるオープンラボが、耐震工事を終えリニューアルした医学研究科東北研究棟に開設されました(図2)。初代の入居者は光生物学分野とトレーサ情報分析学分野となりました。ここを拠点に、革新的な研究成果が発信されることが大いに期待されております。

なお、連携研究センター「フラテ」では概要をまとめたパンフレットを作成いたしました。連携研究センター「フラテ」内規、運営委員会内規やオープンラボ運用要項などが記載されております。興味がある方は、是非ご一読願います。



図2

国際連携室 (International Relations Office) の設置

国際連携室長 (医学研究科副研究科長) 吉岡 充弘

平成18年7月より、医学部医学科・医学研究科に国際連携室が設置されました。日本の国策として、国際的な連携がさらに推進されることを鑑み、留学生の円滑な受け入れ、学部学生や大学院生の単位互換に基づいた国際交流をはじめ、教員による国際共同研究の推進など、新しい時代の幅広い交際連携に対応することが設置の目的です。この度の東北研究棟の改修に伴い、国際連携室が東北研究棟1階に設けられました。室員として、専任教員の高野廣子講師が常駐しています。留学生の方々の気軽な訪問を歓迎しています。他の室員として、吉岡充弘(神経薬理学分野教授)、櫻木範明(生殖内分泌・腫瘍学分野教授)、玉城英彦(国際保健医学分野教授)が担当しています。

国際連携室の設置目的を執行するため、今年度の以下のような重点業務を考えています。

1. 学部間国際交流の推進
2. 留学生受入の促進
3. 留学生受入による研究活動促進成果の解析
4. 将来の国際交流についての提言
5. 留学生と教員および学部生、大学院生等との情報交換会および日本文化紹介の企画・実施

上記5につきまして、4月26日に医学部第3会議室(管理棟1F)において「外国人留学生と教職員・学生の情報交換会」を開催いたしました。医学部医学科・医学研究科では初めての試みとなりました。当日は、留学生12

名、外国人客員研究員1名、在学生11名、教員3名、計27名の参加があり、終始和やかな雰囲気の中、開催されました。

上記1の学部間国際交流については現在、香港大学李嘉誠医学院(The University of Hong Kong, Li Ka Shin Faculty of Medicine)との学部学生交流の具体的な協定(覚書等)の策定と締結へ向けての作業を進めています。これまで大学院生や研究者レベルでの国際交流はなされてきましたが、学部学生の単位互換を含めた国際交流は初めての試みとなります。すべての講義や実習が英語で行われている李嘉誠医学院では欧州からの留学生(医学部生)も多く、小人数による学生-教員双方向性(interactive tutorial)の教育が充実しています。この交流は北大医学部学生に対して大きな教育効果が期待でき、また教員にとってもよい刺激になると考えられます。今後、国際交流推進を医学研究科・医学部の重点項目の一つとして位置づけ、取り組んでいくことが必要だと感じています。



東北研究棟1階(北側)

医学部創立90周年記念事業基金募金活動の現状 —第3報—

医学部創立90周年記念事業実行委員会副委員長 小山 司

医学部創立90周年記念事業に向けての募金活動がスタートしてまる一年を迎えるところであります。医学部・病院教員はもとより同窓会会員の皆様、また関係各方面から、多額の募金をいただきました。7月末現在の募金の納入状況は表のとおりとなっています。

本号から医学研究科／医学部広報誌上に教員寄附者のご芳名一覧を掲載し、謝意を表することとなりました。心よりお礼を申し上げます。

2009年（平成21年）の創立90周年記念事業を推進するには、募金目標額（10億円）の早期達成は悲願となっております。創立記念事業の大きな柱であります医学部会館（フラテ会館）建設は、現医学部の管理棟を取り壊し、その跡地に建設いたします。管理棟には現在2つの講義室がありますので、医学部図書館を改修し講義室を整備する必要があり、その工事を来年度には着工しなければ、医学部会館（フラテ会館）の竣工が遅れることになります。

このような経緯から、来年3月までの中間期募金目標額を7億円といたしました。現在、廣重力記念事業後援会会長と本間研一記念事業実行委員会委員長が中心となって、募金活動の対象を医療関係企業及び一般企業にも拡大し、本格的な募金の要請を展開しています。訪問した企業数は150社を超えるに至っています。また、各卒業期代表（同窓会評議員）が中心となって、同窓会会員の募金活動がさらに推進されています。

これら学外関係者の皆様のご賛同を得るためにも教員の寄付納入率100%の早期達成は悲願であります。現時点で、寄付納入率100%を達成した研究分野、病院診療科の数は合計11となっておりますが、全体の教員寄付納入率は約40%にとどまっています。

教員の皆様におかれましては、中間期募金目標額の早期達成のためなお一層のご理解とご協力をお願いする次第でございます。

寄附金納入状況（19.7.31現在）

寄附金合計 150,908,396円		
◎教員	161名／400名（40.3%）	33,580,000円
（内訳）教授	68名／86名（79.1%）	20,420,000円
准教授	29名／63名（46.0%）	5,160,000円
講師	23名／62名（37.1%）	3,900,000円
助教・助手	41名／188名（21.8%）	4,100,000円
◎分野	3件	3,000,000円
◎同窓生	458名／5590名（8.2%）	72,598,511円
（同窓生のうち教員は除く）		
◎学生の父母	54名／1195名（4.5%）	6,749,885円
◎法人等	43件	34,310,000円
◎篤志家 （団体・個人）	7件	670,000円

教員寄附者のご芳名

（平成19年7月31日現在 50音順・敬称略）

医学研究科

教授 秋田 弘俊、有賀 正、有川 二郎、今村 雅寛、岩崎 喜信、岩永 敏彦、近江谷克裕、大野 重昭、笠原 正典、神谷 温之、川口 秀明、丸藤 哲、岸 玲子、小池 隆夫、小山 司、近藤 哲、櫻井恒太郎、櫻木 範明、佐々木秀直、佐々木文章、清水 宏、白土 博樹、瀬谷 司、玉木 長良、玉城 英彦、筒井 裕之、寺沢 浩一、藤堂 省、西村 正治、野々村克也、畠山 鎮次、福島 菊郎、福田 諭、藤田 博美、古川 博之、本間 研一、前沢 政次、眞島 任史、水上 尚典、三浪 明男、三輪 聡一、武藏 学、森本 裕二、安田 和則、山本 有平、吉岡 充弘、渡邊 雅彦

准教授 秋山 真志、岩永ひろみ、岡本 洋、折館 伸彦、神山 俊哉、川村 信明、工藤 正尊、佐々木 了、篠原 信雄、末永 直樹、田川 義継、田中 伸哉、田中 真樹、傳田 健三、飛驒 一利、平野 聡、本間 さと、矢部 一郎、吉岡 成人

講師 小谷 善久、高野 廣子、田島 敏広、七戸 俊明

助教 秋元 秀俊、泉 剛、大塚 紀幸、小野寺 伸、志賀 哲、鈴木 友己、武市 紀人、田中 輝明、棚橋 祐典、辻 幸子、富居 一範、中川 伸、古川 洋志、宮崎 太輔、宮崎美和子、森松 組子、山口 拓、吉田 隆行、権 赫準

助手 中村 秀樹

退職者 佐田 文宏、澤村 大輔、高山 千利、柴田 雅彦、古田 康、松本真知子

病院

教授 浅香 正博、生駒 一憲、松居 喜郎、松野 吉宏

准教授 加藤 元嗣、佐藤 直樹、長 和俊、

遠山 晴一、村下十志文

講師 阿部理一郎、井上 猛、加賀基知三、
神島 保、久住 一郎、黒田 敏、
齋藤 伸治、佐々木 聡、澤村 豊、
椎谷 紀彦、芝木 昇彦、関堂 充、
原林 透、髭 修平、樋田 泰造、
本間 明宏

助教 青柳 哲、石黒 信久、齋藤 航、
沢口 直弘、鈴木 章之、鈴木 温、
鈴木 清護、高橋 将人、寺坂 俊介、
中丸 裕爾、中山 若樹、新野 正明、
西 信也、三井 貴彦、宮本 正樹、
矢野 俊介

助手 夷岡 徳彦

退職者 宮坂 和男、柏村 正明、北市 雄士、
國原 孝、小玉 和郎、小山 明彦

医学部保健学科

教授 石津 明洋、小林 清一、齋藤 健、
酒井 正春、大宮司 信、千葉 仁志、
八田 達夫、福島 順子、松下 通明、
松野 一彦、三神 大世、森下 節子、
森山 隆則、山本 徹、良村 貞子

准教授 加藤千恵次、河原田まり子

退職者 上野 武治、中村仁志夫

(退職者は、平成18年9月以降に退職した教員)

第46回医学展を終えて

今年も無事医学展を終えることができ、今は安堵の気持ちでいっぱいです。医学部研究棟の新設にともない、例年の半分ほどのスペースで行われた第46回医学展でした。運営経理システムが今年より完全に学友会の管理下に置かれ、確実な財源を得たものの例年の半分ほどの収入で行われた第46回医学展でした。ポリクリがカリキュラム上、開始を半年早めたため、例年の五学年運営体制から四学年へと変わり、圧倒的なマンパワーの不足が叫ばれた第46回医学展でした。

ないものづくしの重なった今年、運営に携わった誰もが「大丈夫なのか」、「本当にやるのか」と何度思ったことでしょうか。私自身も、過去45人の先輩方が継いでこられ、私に渡してくださった医学展長としてのバトンをここで取り落とすことになるのではと幾度ひやひやしたことか知れません。

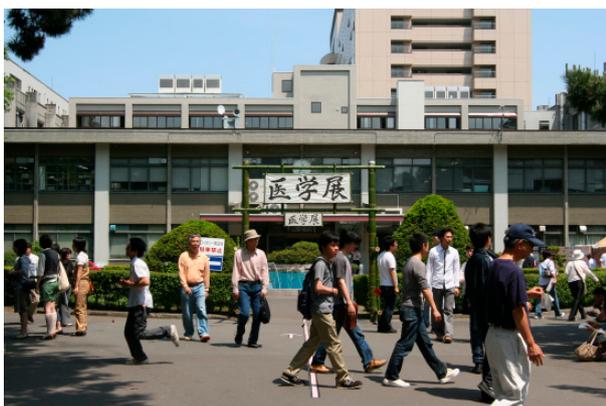
そんな逆境にありながら、貴重な時間をさき、その類まれなる才能をいかんなく発揮して、例年以上といえる

医学展実行委員会 委員長 4年 飯田 あか奈

ほど輝かしい医学展を作り上げてくれた影の立役者たちである、運営委員会チーフ陣およびサブチーフ陣に、この場を借りてまず深く深く感謝したいと思います。本当に、ありがとうございました。

さて、今年の医学展ではテーマを「和」といたしました。これは、長く続いてきた医学展の本来の目標である、「市民の方々と話し現代の医師に本当に望まれているものを知り、また市民の方々にも普段偏見の目で見がちな『医学部』に接していただくことで相互に親しむ」という点に立ち返るつもりで設定したものです。また、それぞれの企画で「和」から自由にアイデアを発送してもらい、これに関連付けることで全体の統一感を出すことを狙いました。

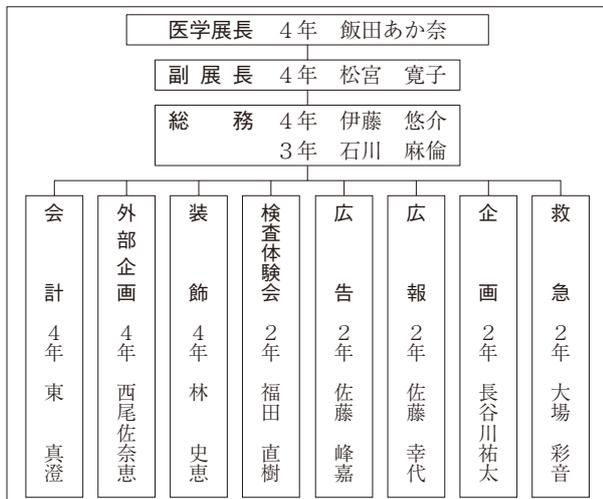
例年ご好評をいただき、待ち時間の長さでご迷惑をおかけしている「市民のための検査体験会」、例年の「講演会」に代わる「模擬授業」、「盲導犬体験」「障がい者体験」「献血」、「救急講習」などに加え、今年は新たに「平



和」を意図したアフガニスタン写真展や実際に外でドクターヘリの着陸・離陸を見学する「ドクターヘリ展示」を行い、多くの皆様の反響をいただくことができました。人を呼び込むことも決して軽んじることのできないファクターと考え、会場装飾やポスター、パンフレットなども徹底的に「和」にこだわってもらいました。そのかきもあり、天気もよく大通り公園ではYOSAKOIソーランFINALという札幌の年に一度のお祭もあったなか、3000人を超える方々にご来場いただくことができました。

皆様の思い出に残り、来年もまた望まれるような医学展であったことを心より願いつつ、第46回医学展長としてのバトン次へ回したいと思ひます。本当にありがとうございました。

〈医学展組織図〉



“検査体験会部門”

～市民と医学生による検査体験会～

検査体験部門は、市民の方々に、実際に医療現場で行われている検査を幾つか体験していただくというものです。例年多くの人にお越しいただひている、医学展の名物企画のひとつとなっています。特に、リピーターの方が多く、健康に対する皆様の関心の高さが伺えます。

今年、会場の変更などの問題により、昨年の8部門から、代謝・エコー・心電図の3部門への縮小を余儀な



くされました。それにも関わらず、例年に負けずとも劣らない活気を見せ、特に代謝部門（骨密度検査、血管年齢測定など）は好評で、多くの方に順番待ちをしていただかなければならないほどでした。

この部門の重要な意義として、普段殆ど接点のない市民の方々と医学部生との間にコミュニケーションの場を設ける、というのがあります。このような交流の場は、私たちにとりましても大変有意義なものであり、今後に活かしてゆけるよう努力してゆきたいと思ひます。

また、例年ご協力いただひているアンケートにも、多くの励ましの言葉やご意見を頂き、スタッフ一同大変感謝しております。ひとつひとつ、大切に読ませていただきました。

例年、多くの方々の協力を受け、この企画は成立してひます。今年も、検査を行う学生の勉強会、待機医師の派遣などで、多くの講座にご協力をいただきました。また、検査機器の貸し出しなどにつきましても、多くの講座、株式会社竹山にご協力頂きました。当日、待機医師を務めて頂ひた循環器内科の4名の先生にも、この場を借りて再度お礼を申し上げます。皆様方のご協力なしには、今年も検査体験会部門を成功させることは出来ませんでした。本当にありがとうございました。

(検査体験会部門チーフ 2年 福田直樹)

企画Ⅰ “模擬授業”

昨年度までの「講演会」に取って代わる形で、今年度は新しい試みとして「模擬授業」が企画され、「もっと身近な医学部を、もっと実感できる医学部を」をコンセプトに以下の2つの模擬授業を開催いたしました。

「スポーツ医学入門」

菅原 誠 氏 松田整形外科病院院長

「診療学入門」

前沢政次 氏 北海道大学大学院医学研究科教授

「スポーツ医学入門」では、北海道大学医学部の卒業生であり、松田整形外科病院院長である菅原誠先生にお越しいただき、普段先生が診られている患者さんの中でも特に多い怪我についてや、怪我の予防法、及び怪我をした時の簡単な処置等の講義をしていただきました。また、終盤、運動別のストレッチの方法などを甚平を着た学部生が実演するなど、ユニークな授業となりました。

「診療学入門」では、医療システム学分野教授である前沢政次先生をお招きし、診療における基礎的な理念をはじめ、これからの医療についての講義をしていただきました。また、「もっと実感できる医学部を」ということで、ご来場くださった方々に、聴診器と水銀式血圧計の使い方を説明し、実際に血圧測定をするなど市民参加

型の授業となりました。

また、本来は「スポーツ医学入門」の説明時に分かりやすいようにとのことで用意した骨格標本でしたが本物の人骨ということもあり、みなさま非常に関心抱かれ、両授業後、学部生によるミニ模擬授業も開催されていました。

どの授業も、大変充実したものとなり、また参加者の方々の質問の多さに医療への関心、医学への関心が強いことを実感させられました。今回の模擬授業は、そうした一般の方と医療関係者との交流の場を設ける架け橋となったと思います。

最後になりましたが、多くの方々によってこの模擬授業は成功いたしました。本当にありがとうございました。
(企画部門チーフ 2年 長谷川祐太)

企画Ⅱ “科学教室”

昨年度の医学展より始まり、大好評を収めた科学教室。今年度も、主に小中学生を対象に、科学の不思議を体験していただきました。医学部の科学教室ということもあり、「医学に絡めた実験を」をコンセプトに以下の4つの教室を開きました。

「味覚のふしぎ」

—ミラクルフルーツを食べてみよう・ギムネマ茶を飲んでみよう—

「色が見えるしくみ」

—色覚実験装置を作って実験してみよう—

「こどもにしか聞こえない音」

—モスキート音が聞こえるかな??聴診器を作ってみよう—

「手羽先の解剖」

—手羽先を解剖して、組織を見てみよう—

どの、教室も大盛況で、予想していた参加者人数を大きく上回ってしまい、急遽実験材料を買い足しに行くハプニングも(笑)それほど楽しみに来てくれた子供たちが本当に多く、非常に驚きと喜びを隠すことができませんでした。

実験の最後に全体で集合写真を撮り、後日その写真を手書きのお礼状と一緒に郵送したり、お土産として、食べるとすっぱいものが甘く感じる不思議な果実ミラクルフルーツをプレゼントするなどの工夫も見られ、参加者の方に非常に喜ばれる企画となりました。

また、科学教室のスタッフとして動いてくれた学部生たちも、始終子供たちと楽しみながら、実験の手伝いをしていました。

参加者、スタッフ両方から「本当に楽しかったです。また来たい(やりたい)です。」との言葉をいただき、

みんなから愛される企画となって本当に良かったです。本当にありがとうございました。

(企画部門チーフ 2年 長谷川祐太)

企画Ⅲ “献血”

第46回医学展でようやく4回目を迎える献血の活動の簡単な報告と、責任者として感じた思いや反省点をまとめてみたいと思います。

今年も例年通り、北海道赤十字血液センターのご協力を頂き、6月9日(土)の一日のみ医学部玄関前ロータリーにて実施しました。昨年までと異なる点は献血車を1台から2台に増やしたことが挙げられます。学生スタッフとして私以外に1年生4名、5年生1名に協力を頂きました。もちろん学生スタッフが採血をすることはなく、私達の役割は一人でも多くの人に献血をしてもらうため、メインストリートを行く人達に声をかけていくことでした。献血の看板を掲げながらティッシュを配り、道行く人々に声をかけるスタッフの姿を見かけられた方も多と思います。

道行く人たちは私達献血スタッフの姿に目を止め、いくらかの言葉を残して行かれる方がいます。一番多いのが“へー、A型足りてないんだ~”とか、“そういえば血液型何型?”という単なる興味から発生する言葉でした。その中に一つ、私の中に大きく残った言葉がありました。“学園祭で献血かよ!笑”という何気ない一言。学園祭という場で何らかのサービスを受けにきた人達に血液の提供をお願いするという、場の流れに逆らった活動であること。それだけにこの活動は難しいかもしれないと焦りを感じた瞬間でした。

結果的に例年に負けないくらいの数の方々に献血のご協力を頂いたことはとてもよかったのですが、6時間半の間、献血のお願いのために見知らぬ人々に声を掛け続けるのはなかなか大変なものでした。私がこのように感じているのですから、1年生のスタッフの皆さんの気苦労は私が感じたもの以上だったでしょう。声をかけた人が献血を了解して下さった瞬間はとてもうれしく、気持ちのいいものでしたが、その瞬間に立ち会うたびに献血活動の大変さを実感しました。

献血を経験している人や、輸血を経験して献血の大切さに理解のある人は比較的簡単に献血に応じてくれます。言うまでもなかったかもしれませんが、献血未経験の人から協力をいただくのは本当に骨が折れました。なぜ献血が嫌かと尋ねると、“なんか怖い”とか“なんとなく気持ち悪い”などの、献血に対する理解不足からくる理由が意外なほど多いのです。そのような人達に言葉を尽くして献血について説明し、実際に献血を体験してもらって理解を深めてもらうことができればこそ、医学展での献血活動の成功と言えるのではないかと感じまし

た。もちろん今年も多くの献血未経験の方に協力を頂くことができましたが、「献血を説明する」ことに来年以降重点を置いてみるのも一つの案かもしれません。

最後にはなりましたが、ご協力いただいた北海道赤十字血液センターの皆様、学生スタッフの皆さん、献血にご協力いただいた皆さん、献血ポスターの掲示にご協力いただいた皆さんなど、献血部門に関わっていただいた全ての方々にお礼を申し上げます。ありがとうございます。

(企画部門 献血担当 2年 本澤大志)

企画Ⅳ “写真展”

アフガニスタン写真展～彼女の夢見たアフガニスタン～と称されたこの写真展は、今回の新企画です。国際医療にたずさわるNPO法人宇宙船地球号から全68枚の写真を貸していただいたの展示となりました。

この企画は市民のための検査体験会などの待ち時間に気軽に立ち寄り、かつ医療に興味を持っていただけるものとして考え出されました。内容としては、一人の少女に焦点を当ててアフガン難民を追った物語形式の展示となりました。かつて光の国と呼ばれたアフガニスタンが多くの戦争で荒廃し、人々は難民として他国に逃れます。その時当法人の代表である山本敏晴氏が難民キャンプで難民の少女ザクネと出会います。彼女は母国に戻って医師となることを夢見ていました。数年後、山本氏は夢を果たしたザクネと再会を果たす、という物語です。戦争で荒れた町の写真や片足を失くした男性の写真、一方で輝く笑顔を見せる子どもたちや愛する我が子を抱く母親の姿など、印象的な写真が数多く展示されました。

当日は場所が良かったこともあり、医学展に来場されたほとんどの方に足を運んでいただくことができました。アンケート結果も大変好評で、勇気付けられた、もっと多くの人に知ってほしいなどの意見が寄せられました。写真展で使った文章は、山本氏著作の写真集「彼女の夢見たアフガニスタン」からの抜粋に、ペンシャール会中村哲氏の講演会で聞いた内容を加えたものだったのですが、医師の視点からの文は新鮮、戦争について考えさせられた、などの意見をいただくことができました。来年もやってほしいとの意見も多く、ぜひ来年にもつなげてほしいと考えています。

最後に、文章考案に協力してくれた2年出倉くん、1年土屋くん、展示に協力してくれた多くの方々や私のわがままを聞いてくれた医学展スタッフメンバーの皆さん、そして展示写真を貸していただいたNPO法人宇宙船地球号の皆様、当日ご来場くださった皆様には最大の感謝を述べたいと思います。本当に本当にありがとうございました。

(企画部 写真展担当 2年 佐藤未知)

企画Ⅴ “障がい者体験会”

第46回医学展障がい者体験会部門責任者の河口洋平です。障がい者体験会とはなんぞやって事なんです、読んで字の如く、来場者の方々に障がい者体験グッズを装着してもらって普段頭では分かっているけどなかなか実感の沸かない障がい者の方々の大変さを少しでも分かって頂ければいいなという部門です。具体的には車椅子、妊婦、高齢者（障がい者ではないですが……）の体験ができるようになっていきます。

毎年医学展には沢山の来場者の方がいらっしゃる訳ですが、医学部に入る前に必ず医学部ロータリーを通る事になります。また、メンストを歩いていて医学展なんて全然知らないよなんて人たちもロータリーでなんかやっていたら目に留まる訳です。

そういった意味では毎年医学部ロータリーを使って車椅子やら何やらで何かと目立つ障がい者体験会は実に「おいしい」部門であります。

体験会にいらっしゃる方々の年齢層は子供からお年寄りまで幅広く、子供には車椅子が大人気で大変さを分かってもらおうというよりは、ほとんどオモチャ感覚で爆走するので付き添うスタッフは大変でした（笑）

妊婦体験は男性陣に好評で「え？これマジきついんですけど」「こんなんで暮らすとか絶対無理だ!!」「女の人ってすごいんですね……」などなど、沢山の感想が聞こえてきました。年齢別に見てみると若い世代が一番驚いていたようです。若い男性が「これマジヤベェ!!」って言ったのを鮮明に覚えてます（笑）

体験会の良い所は、ただ説明するだけじゃなくて来場者の方々と色んな話ができるところにもあると思います。市民検は大盛況でなかなか一人一人に時間が割けないけど、体験会と一緒にロータリー回ったり、市民検ほど人がいないのもあって話が弾みます。医療過誤や医師不足といったマジメな話題から学生の一人暮らしとか、医学部内のカップルの話まで、ほとんどが体験会とは何の関係もない雑談でしたが、医学部に入って1年半、周りを専門職の人間に囲まれ、なんだかんだで医者イズムに浸っていた自分としては市民の方々が医学部や医者にどんなイメージを持っているのか、なんてのが分かって、医者になろうと思った時の熱い気持ちを思い出させてもらいましたし、ここ最近医療ミスやら何やらで色々あるけど、やっぱり日本の医療のこれからを作っていく人材として期待されているなという実感が沸き、気合を入れねば!!と身の引き締まる思いがして、勉強に励もう!という気分になりました。

最後に、医学部2年有志による模擬店や市民検、盲導犬体験会と自分の器量も考えずに二つ返事で手伝いをOKし、「マジヤベェ」忙しきだった医学展ですが、なんとか無事終える事ができたのは一重に1年生スタッフや

実行委員の先輩方のおかげかなと思ってます。紙面を借りて御礼申し上げます、本当にありがとうございました。
(企画部門 障がい者体験会担当 2年 河口洋平)

“救急部門”

救急部門では、AEDを用いた心肺蘇生法と三角巾を用いた応急手当を市民の皆様にご体験していただきました。昨年多くの方々からご好評をいただいた企画だったので、今年はメインの企画にしようと思い、スタッフの勉強会を何度も開き、見やすい展示を心がけるなどして、去年以上に力をいれました。

当日は予想以上に盛況で、たくさんの方々に体験していただき、人だかりができることもありました。

近年、様々な公共施設でAEDを設置するようになったため、特に「万一の時のために、AEDの使い方を一度学んでみたかった」という方が多くみられました。また、「体験できてよかった。」「ためになりました。どうもありがとうございます。」「これで誰かの命を救えるかもしれないですね。」といった、有り難いお言葉も多くいただきました。市民のニーズに応える企画の大切さを改めて感じました。

また今年初めての試みとして、手稲溪仁会のドクターヘリに離着陸のデモをしていただきました。市民の方々の誘導が難しい、ヘリが来る時間が限られているなどの問題があり、人が集まらないのではないかと不安に思っていました。しかし実際は、数百人もの方々に集まっておいただき、ヘリを間近で見いただくことができました。

市民の方々がドクターヘリを身近に感じることで、ドクターヘリが普及していくきっかけになればいいと思います。

救急部門の企画をきっかけに、救急医療を身近に感じ、興味を持っていただくことができたのではないかと思います。このような積み重ねがいつか、誰かの命を救ったり、健康を守るであろうと信じています。

最後になりましたが、北大救急部の早川先生をはじめ、卒後研修センターの皆様、ドクターヘリの関係者の方々、株式会社マック様、そして関係者の皆様方には、お忙しいところご尽力いただき、大変お世話になりました。こ



の場を借りて厚く御礼を申し上げます。

(救急部門チーフ 2年 大場彩音)

“外部企画部門”

医学部の部活や学生団体の出店を担当する部門です。今年は毎年出店してくれていた店が1つ減りましたが、2年生の有志が出店してくれ、屋内・屋外あわせて5店が開かれました。参加団体の把握や通行証の手続きなど仕事が遅れてしまい、参加団体の方にはただならぬ苦勞をかけてしまいました。人数の少ない団体もあって大変だったようですが、それにもかかわらずいいお店を出して医学展を盛り上げてくれて、本当に感謝しています。来年この部門を担当する方は、仕事を早め早めに進めてください。来年もたくさんの方が参加してくださるようお願いしています。

(外部企画部門チーフ 4年 西尾佐奈恵)

“装飾部門”

今年の装飾部の目的は、医学展の存在を強くアピールすることと、本医学展のテーマである「和」を体現することでした。この「和」というのは、一つには「医学生と市民の皆様との和」を表します。近づきたい医学部の印象を払拭して、親しみやすく入りやすい雰囲気にしようという願いをこめたものです。このテーマをもう一つの「和」、すなわち「日本文化としての和」の装飾を施すことによって形にしようと思いました。

医学展を大々的にアピールする上でまず最前線で活躍したのは、メインストリートにまたがらせた横断幕です。幅の広いメインストリートを横断させるために、去年使用した横断幕をさらに拡張し、また幕を二枚重ねにして南北どちらから来るお客さんにも文字が見えるようにしました。アピール効果も上々で、多くの方から遠くからでもすごく目立っていたとの評価をいただきました。

そして次なる目玉は噴水手前に設置された竹門です。北海道には基本的に生息しない竹を使って大きな門をつくり、インパクトのあるアピールをしようと計画されました。ところがもともと北海道にないものだけに、竹を入手するところから難航しました。①本州の店から取り寄せる、②北海道で唯一竹が生えているという松前町に採りに行く、果ては③自分たちで竹の子を植えて栽培して手に入れる、という案までとびだしましたが、限られた予算と時間で分量の竹を確保するには無理がありました。最終的には札幌市内に竹材専門店を発見することができ、地道な交渉によって予算内で目的の物を手に入れることができました。そして竹建築を製作した経験を持つ、通称「竹の匠」とよばれるスタッフを中心に昼夜を徹した過酷な作業の末、高さ3.5mに及ぶ竹門が完成しました。当日は、子どもたちの格好の遊び場となった

り、市民の皆さまや竹建築のプロの方に高評価をいただいたりと、作り手側としては大変嬉しい結果をもたらすことができました。

一方、屋内の装飾では理系の施設特有の無機質で殺風景な雰囲気をいかに変えるかが焦点となりました。正面玄関から自習室までの電灯に和紙をかぶせてみたり、階段の踊り場の大きな窓に和紙を貼りつけてみたり、手すりをすだれと竹で装飾してみたりと、時間と予算の許す範囲でいろいろと工夫をこらしました。

その他にも随所に和の素材を用いた装飾をほどこしましたが、石川麻倫さん（三年）、佐藤峰嘉くん（二年）の通称「書道部」の活躍なしでは成功しえませんでした。お二人の風格ある達筆な文字によって、ただの案内の掲示も和の雰囲気を高める「装飾」になりました。

今年は「テーマに沿った統一感のある装飾をする」という新しい試みで、前例のないからのスタートだったために、いろいろな面で大変苦労しました。何度も何度も試作品を作っては失敗、材料の入手に奔走、直前の一週間は学校に泊まりこみ、さらに直前4日間は徹夜という、過酷な道程でした。ともすればくじけそうになることもありましたが、仲間たちと励ましあって乗り越えることができました。あらためて、人の温かさや協力することの重要性などを実感し、大変いい経験になりました。もともと装飾は企画系と異なり医学展の主役ではありませんが、来年以降も空間の創造を通して医学展に欠かせない存在になればいいと思います。

最後に、装飾活動に手を貸して下さったスタッフの皆さん、私たちの無理なお願いを聞いて下さった竹材店の方、直前一週間の泊り込み作業を温かく見守って下さった守衛さん、そして医学展に来て下さった市民の皆さまに、この場を借りてお礼を申し上げます。

（装飾部門チーフ 4年 林 史恵）

“広報部門”

医学展の開催に向けて、来場者の方にお配りするパンフレットやちらしの作成および集客が、広報部門の主な業務です。かなりタイトなスケジュールの中、今回の医学展のテーマである「和」を基調としたものを発行しました。医学展の会場内に青竹を多用するとのことでした

ので、ちらしの背景も同じ色に。多くの有能なメンバーの助けもあり、一部の方からは装丁など、お褒めの言葉も頂戴しました。

例年がない試みとしては、テレビ局に取材を依頼できた点です。医学展の開催後ですが、ドクターヘリの映像がニュースで放映されました。来年度以降、医学展の更なる発展に寄与できるとすれば幸いです。

（広報部門チーフ 2年 佐藤幸代）

“広告部門”

昨年度までこの部門は協賛部門と呼ばれていましたが、協賛金の扱いの変更に伴い広告部門となりました。医学展は学友会、医師会、病院、企業からの温かいご支援により運営されています。この部門では、医師会、病院、企業の広告をパンフレットに掲載させていただくことと、北海道、札幌市、札幌市教育委員会のご後援を頂くことを行いました。今年度は前述の変更点で多くの団体の皆様方にお手数をおかけしてしまいましたが、多大のご支援を賜り、本医学展の成功へとつなげることが出来ました。この場を借りてお礼申し上げます。

（広告部門チーフ 2年 佐藤峰嘉）

“会計部門”

会計の仕事は予算を作成し、学友会からの補助金や広告代を管理して各部門へ適切に分配することです。今年度から医学展の運営が学友会の傘下に移行しており、例年通りの予算でよいのか悩みました。繰越金がないので、今回の医学展のために使える予算は当然限られます。その中で最大限各部門が希望する額を満たせるように、予算を考えました。

かなりの大きな額を扱う、責任の重い仕事であると感じました。

今回は準備に取り掛かるのが若干遅かったので、実際に使いたい金額を各部門の担当者が把握し切れていない段階で予算を組んでしまい、途中で大幅に予算が余ってしまうというトラブルがありました。来年度は、余裕があったら早めに各部門で企画内容を考え、予算を希望する形が理想的かと思います。

（会計部門チーフ 4年 東 真澄）

お知らせ

◆ フラテ祭2007プログラムの決定 ◆

広報第31号（6月発行）にて、ご案内いたしましたフラテ祭の詳細が下記のとおり決まりましたので、お知らせいたします。

日時：平成19年9月22日（土）14時00分～
 （※第31号では、13時30分からとお知らせいたしましたが、変更になりましたのでご注意願います。）

場所：北海道大学医学部

第1部 講演会（医学部第2講堂）14時00分～

「北大医学部の近況と展望」

北海道大学医学部長 本間 研一

「荒波に揺れる北大病院」

北海道大学病院長 浅香 正博

「北海道の医療の現状と対策」

北海道医師会長 長瀬 清

第2部 ラボ・キャンパスツアー 16時00～

Aコース（病院巡り）

【北大病院地下のPET、MRI等の
診療施設見学コース】

Bコース（ラボ巡り）

【平成16年に竣工した医歯学総合研究棟の
実験施設見学コース】

Cコース（キャンパス巡り）

【総合博物館、新渡戸稲造公園、ポプラ並木、
北キャンパス等の見学コース】

第3部 フラテ交歓会（医学部図書館3階）17時30分～

医学部教員による音楽演奏の中での交歓会

医学部フラテ祭実行委員会事務局

◆ 平成19年度科学研究費補助金採択状況 ◆

医学研究科（単位：千円）

研究種目	新規申請数	継続数	平成19年度	
	件数	件数	件数	交付金額
特別推進研究	1	0	0	0
特定領域研究	14	14	16	99,700
基盤研究（S）	4	1	2	43,680
基盤研究（A）	8	3	4	57,980
基盤研究（B）	32	15	27	192,920
基盤研究（C）	38	12	29	65,390
萌芽研究	46	10	18	32,400
若手研究（A）	1	3	3	18,720
若手研究（B）	14	13	18	25,400
合計	158	71	117	536,190

※ 採択率（新規・継続を含む） $117 \div 229 = 51.0\%$

◆ 第31号の掲載漏れについて ◆

第31号に掲載した平成18年度各種助成の採択状況に掲載漏れがございました。下記のとおり追加させていただきます。

きます。深くお詫び申し上げます。

平成18年度 助成金獲得状況

財団法人等	種 別	氏 名	交 付 金
秋山記念生命科学振興財団	財団賞	大野 重昭	2,000,000
	一般助成	本間 さと	1,000,000
	奨励助成	西屋 禎	500,000
		西原 広史	500,000
		北市 伸義	500,000
		新開 大史	500,000
伊藤医薬学術振興財団	学会等助成	吉岡 充弘	400,000
	海外等研究者招聘	本間 さと	400,000
	海外学会等出席研究交流助成	中山 章	150,000
		古川 洋志	150,000
		馬 明月	150,000
	海外留学研究交流助成	山崎 修司	200,000
		中野 記嗣	200,000
ノーステック財団	共同研究補助金	笠原 正典	1,000,000
	研究開発シーズ育成助成金	松本美佐子	2,000,000
	若手研究補助金	新開 大史	400,000
持田医学薬学振興財団	研究助成金	田中 伸哉	1,000,000
		絹川真太郎	1,000,000
内藤記念科学振興財団	奨励金 研究助成	渡辺 雅彦	2,000,000
安田記念医学財団	研究助成	笠原 正典	2,000,000
	研究奨励金	梶 康一	500,000
かなえ医薬振興財団	研究助成	矢部 一郎	1,000,000
臨床薬理研究振興財団	研究奨励金	古本 智夫	2,000,000
神澤医学研究振興財団	研究助成金	畠山 鎮次	1,000,000
上原記念生命科学財団	研究助成金	田中 伸哉	5,000,000
		大場 雄介	2,000,000
	研究奨励金	外丸 詩野	2,000,000
	リサーチフェロウシップ	藤本 勝也	2,500,000
	ポストドクトラルフェロウシップ	東梅 友美	3,600,000
公益信託小野がん研究助成基金	研究助成金	石津 明洋	150,000
日本リウマチ財団	リウマチ性疾患調査・研究助成費	小野寺 伸	1,000,000

追加分

ファイザーヘルスリサーチ振興財団	国内共同研究採択者	古本 尚樹	590,000
------------------	-----------	-------	---------

広報室便り 2

①東北棟の完成は広報室にも嬉しいできごとで、その1階に本当の「広報室」ができました。曇りガラス中が見えませんが、ノックして、ぜひ、訪れてみてください。電話は5064です。②広報室では、すでに少しずつ医学研究科のホームページを改良していますが、10月には完全にリニューアルする予定で、日夜いろいろなアイデアに取り組んでおります。こんなHPにしてほしい、というご要望がありましたら、ぜひお知らせください。ただ、広報室が作るHPは医学研究科からの入り口だけです。各分野のHPの製作、その内容に関してはそれぞれで責任を持ってご対応ください。③医学研究科の出版してきたパンフレット・広報誌・その他を少しずつ管理し始めました。広報室管理のデジタル素材としては、連携センター「フラテ」パンフレットに利用した東北棟の写真が第1号でした。味気ない写真ですが、カメラアングル確保のために「崩壊の危険あり、立ち入り禁止」の札をくぐって中棟屋上からの撮影を敢行しました。④今後、著作権対策などをした上で、これらをいつでも利用できる共通資料として保管する室として信用を築いていきたいと思っております。新しいHPでは、広報室管理の書物とデジタル素材が職員専用ページでわかるようにする予定です。

広報室長 白土 博樹

編集後記

医学研究科・医学部広報第32号をお届けします。大学からの情報発信ツールの一つとして、学内および学外の多くの方々に読んで頂けることを願っております。医学研究科・医学部の広報活動の一環として、8月にはオープンキャンパス、9月には北大セミナーin函館が予定されています。リニューアルされるホームページとともに、より充実した情報発信・広報活動が展開されていくことを期待します。今後とも皆様のご協力を宜しく御願いたします。(山本有平)

Home Pageのご案内

医学研究科/医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho//index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付けメールアドレスは、

kouhou-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科/医学部

発行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電話 011-706-5892

編集委員 近江谷克裕、山本 有平、田中 真樹
佐藤 松治、西岡 健、平塚 志保